

つあるというのも皮肉である。送られてきた報告書をめくりながら、北京市内のレストランで、是非とも広島を

訪れたいと語った Robock 氏のことが思い出された。

## 渡辺光先生の思い出

栗原尚子

渡辺先生が御逝去なされてから約9カ月、その御生前の幅広い御活躍ぶりを震づけるように先生の思い出を多くの方々がすでに御書きになっている。そのような方々の文章には及ぶもつかないが、先生の講義を4年間聞いた1人としてその思い出を綴ってみたいと思う。長い年月がすぎ去った後、教師と学生との関係で心に強く残っていることという、講義の内容そのものよりも、そのあい間でのかわした一言、二言が印象に残っていることが多い。その点からいうと、私の場合は、講義の折々に、「君は1番で入学したのだね。すごいね——」とニヤーとされることであった。一番の内容が問題である。

こう書くとう入学試験の結果が一番なのかと大方思われることだろうが、残念ながら全くそうではなく、真相は受験番号の一番である。4年間、講義という一番前の席を陣とっていたため、講義の最中でも教壇からおりられ、顔をしばしばとのぞき込まれたこととともによく覚えている。自分が教壇に立つ番になってみて、いつも方向違いの方をみながら一方的に話しを進めていることを考えると（その上、話すのが早すぎるというマイナスまで加わり）、学生の顔をみながら講義をするのが以外とむずかしいことを実感している。誰でも覚えているのが、ハック耕で、こうやってするのだといって棒をもって教室をかけまわられたことなど、先生は、学生の講義への関心を常にいろいろな形で呼び起こしていられたと思う。大学を卒業してから、法政大学の大学院で御顔をみか

けることはあったが、講義には出席できなかった。その後、地理思想史の研究会で御一諸する機会があり、その御元気な御様子に驚いたものであった。我々の当時の研究会は、研究報告が夜の11時頃終ると、その後もう一ラウンドあり、アルコールも加わりながら、堅い研究会の余白を埋める話しがとびかい、午前1時すぎになるのが普通であった。この折でも、先生はできるだけおつきあい下さり、いろいろ話しを聞かせて下さったのである。研究会メンバーの関心は、日本の地理学界の中でも、早い時期にアメリカで御研究なさった先生からみた、当時のアメリカ地理学界の状況であり、そしてその日本の地理学界への受容に関してであった。そして誰もが驚嘆したのが、その記憶力のすごさであった。

日本における近代地理学の形成において先生の果された役割あるいは先生がかかわっていらした時期の地理学をどのように考えていらしたか、御聞きしなければならぬことを沢山残したまま、早くも私達の目の前からさられたことが本当に残念に思われる。あまりにも御元気でいらしたため、こんなに突然にとは想像しなかったのである。

昨年秋から、先生の御著書を整理させていただく機会があり、仲々見つからないという本を頼まれて、それを多くの著書の中から見出し出したとき、国際的に御活躍されたその幅の広さを実感したものである。心から御冥福を御祈りいたします。

## リモートセンシング解析技術者研修に参加して

渡辺真紀子

幸運にも、科学技術庁主催のリモートセンシング技術者研修に参加することができた。期間は10月18日から11月10日までの延べ13日間、受講者は22名で国公立の大学や研究機関において現在あるいは将来的にリモートセンシングにかかわる研究、業務に携わる人を対象としたもので、59年度で7回目になる。前半の6日間は、東海大学附属望星高校（都内・渋谷区）を会場に、主にリモ-

ートセンシングの原理・応用分野に関する講義が行われ、その合間に、東海大学情報技術センターと埼玉県鳩山町の宇宙開発事業団地上観測センターを見学した。地上観測センターでは、1986年に打上げが予定されている日本の海洋観測衛星 MOS-1 の受信局の建設が着々と進められていたが、現在受信中のランドサットデータも含めて、今後データの保存がどのようになされるのか、気

になるところであった。また、リモートセンシングの解析研究を手広く行っている東海大学の充実した設備には驚かされた。

講義の内容は、リモートセンシングの基本原則に始まって、データの処理システム（ハードウェアとソフトウェア）、写真判読、ランドトランスデータ、画像のエンハンスメント、リモートセンシングの応用、画像処理の数学的手法、マイクロ波イメージング、気象衛星の地上処理システムに至る、実に多岐にわたった、必要にして十分なプログラムであった。日本では優秀なCCD素子カメラが開発されても、それを搭載する航空機や、航空機の専用滑走路がないこと（MOS-1にはCCDセンサーが搭載されることになっている）、また同じく日本では合成開口レーダーを使える飛行機がなく、カナダから借りてくる事情からマイクロウェーブを利用したリモートセンシングの応用では日本がまだ初歩の段階であることなど、日本におけるリモートセンシング技術の実用の立ちおくれについて、講師の先生方が訴えられていたのが印象に残った。また、日本人はとかく解析の精度を問題にするが、アメリカではむしろ時系列的な変化に主眼をおいて実用化しているとのこと、やはり国土のスケールの違いがこういうところにも現われているようだ。

後半の7日間は港区六本木のリモートセンシング技術センター（RESTEC）と株式会社ナック（NAC）において、リモートセンシングデータのデジタル解析とアナログ解析が行なわれた。中でも、今回から取り入れられたパソコンを使った解析実習は、わずか1日という限られた時間であったが、受講者の研究機関の実情に最も即しており、今後習得した技術を活用する上で、たいへん有意義だった。

デジタル解析実習では、リモートセンシング解析用に設計された2つの機種、IMAGE100とMDASを使い、以下の課題が与えられた。課題その1『航空機MSSのデータを解析し、3つの地域（富山湾、富山県上市市、愛知県佐久島）を対象に、それぞれの土地被覆状況と温度分布の関係を考察せよ』、課題その2『ランドサット・MSSデータを使用し、4つの都市（札幌、東京、京都、北九州）について土地利用を分析し、都市環境について考察せよ』。機械の操作を覚えるのに半日を費やしたが、技術そのものより得られた結果をいかに解析、評価するかがキーポイントである。その意味で、リモートセンシングの解析には地理学の知識は不可欠であることを感じた。

大学にもどってから教室のパソコンのシステム（NEC 9801）を使ってランドサットデータの画像処理の一例を試みたが、200本の走査線（高解像ディスプレイを用いれば400本）を画面に出すのに5～6分かかった。くる日もくる日も土地利用分類ばかりで癖していた頃にはわからなかったが、RESTECのIMAGE100やMDAS（ハードウェアで計算処理され、瞬時にフォルスカラー合成や、カラーレベルスライスをやっつけのける）システムのすばらしさが後になってわかった。

連日、朝9時から夕方5時までの研修はきつかった（とくに最終報告書を提出する時には、精も根も尽きた）けれども、修了証を手にするまではと、必死でがんばったのは、自動車免許取得と教育実習以来のように思う。久々に充実感を味わうことができた。なお、今回の研修の参加をお許しいただいた教室の先生方、そして助手室不在中にお世話になった教務補佐の方々には、この場を借りて感謝の意を表したい。

## ムングァ（今日は）・貴州の苗族

江波戸 昭

去る12月17日、天候不順で広州空港に4時間も足どめされたわれわれ「地理学訪中団」の一行は、ようやく飛来した4発のプロペラ機に乗って西へ2時間、暗雲を抜けたとたんに着陸という巧技に助けられて貴陽空港に降り立つことができた。広州と違って変わった身を切るような寒風に一同とまどいの表情、気温は2℃だという。出迎への通訳、大学出たての若い何鳴さんに先導されてバスに乗り、宿舎の花溪賓館に着いた。

翌朝も空はどんより、「天に三日の陽光なく、地に三

里の平地なく、民に三文の富財なし」という諺どおりの貴州省だ。「陽光が貴いのでこの名がついたのです」といわれる人口80万の省都貴陽の町もその郊外の農村も、心なしか暗いたたずまいだ。黒っぽい瓦やスレート、鉄平石的なうすい石を並べた屋根のためもあるが、とにかく貧しさを感じさせる。

その日の行程は、貴陽から苗族の居住する中心地凱里まで、東へ150kmほどの道のりながら、標高千メートルをこえる峠越えの山道つづきで、事故にまき込まれたこ